



統計から社会の実情を読み取る

第159回 ひとり暮らし比率の地域差

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学卒。勸国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



東京で特段に高いひとり暮らし比率

前号では、ひとり暮らしが各年齢層で、そして特に若年層と高齢層で大きく増えてきた点についてふれた。本号では、同じように国勢調査

の結果を使って、どの地域でひとり暮らしが多いか、またどの地域でひとり暮らしが少なく家族同居が多いかを、年齢別の構造を含めて見てみよう。

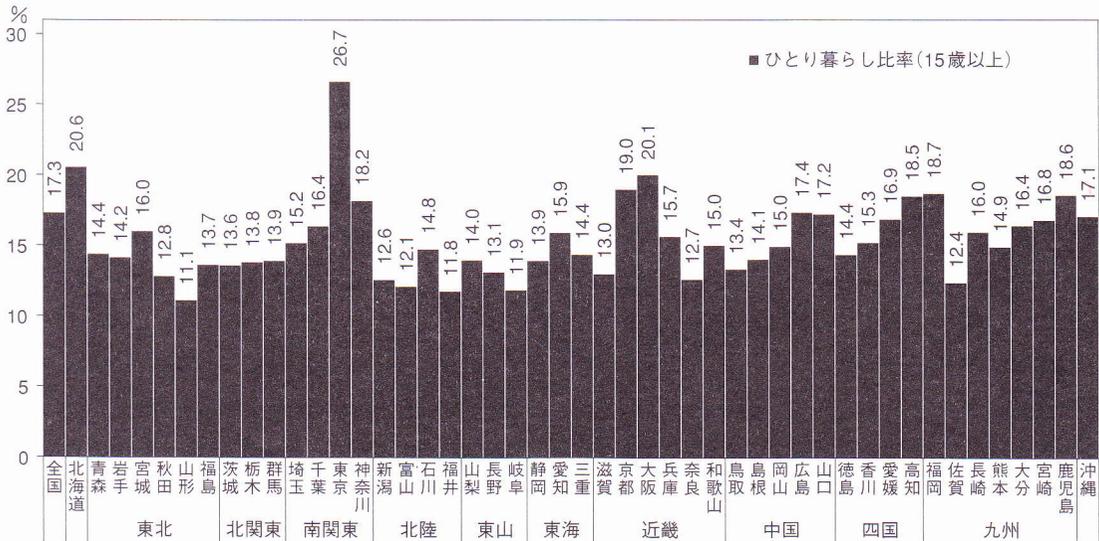


図1 都道府県別のひとり暮らし比率(2020年)

注) ひとり暮らし比率は15歳以上の単独世帯数を15歳以上人口で除した値。
 単独世帯は一般世帯のみ(寄宿舍や高齢者施設など施設等の世帯の単身者は含まず)。
 資料) 総務省統計局「国勢調査」

都道府県別のひとり暮らし比率（15歳以上）を図1に掲げたが、これを見ると、比率が最も高いのは東京の26.7%であり、4人に1人を超えている。

東京に次いでひとり暮らし比率が高い地域は、北海道の20.6%、大阪の20.1%、京都の19.0%と続いている。東京が2位以下の地域を大きく引き離している点が特徴的である。

これは、次節以降に見るように、若年層も高齢層もひとり暮らし比率が他の都道府県を断然引き離して高くなっている東京の地域性のためである。

逆に、ひとり暮らし比率が最も低いのは山形の11.1%であり、10人に1人の水準である。山形に次いで、福井の11.8%、岐阜の11.9%がいずれも11%台で続いている。東京との差は極めて大きいと言わざるを得ない。

年齢別のひとり暮らし比率から見た地域の多様性

次に、年齢構造の具体像を得るため、いくつかの都道府県で15歳以上の5歳階級別のひとり暮らし比率を見てみよう。

図2上に、ひとり暮らし比率トップの東京と最低の山形、およびその中間の鹿児島を全国平均と比較したグラフを掲げた。また、図2下に、この3地域ほどではないが特色のある大阪、奈良、宮城のグラフを掲げた。

図2上を見ると、東京はすべての年齢層（親元にいる15～19歳を除く）でひとり暮らし比率が全国平均と比較して非常に高くなっており、まさに「ひとり暮らし都市」と言ってもよ

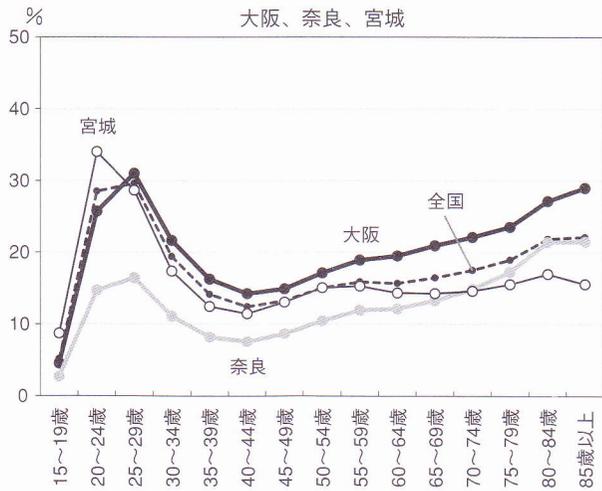
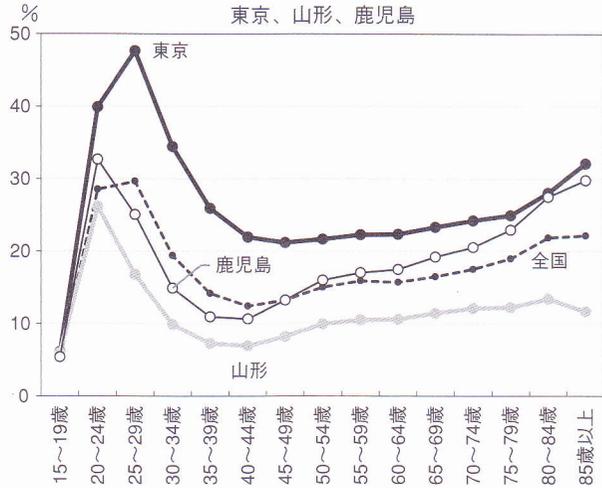


図2 年齢別のひとり暮らし比率（都道府県）

注) 2020年。ひとり暮らし比率は年齢別単独世帯数を年齢別人口で除した値。単独世帯は一般世帯のみ（寄宿舍や高齢者施設など施設等の世帯の単身者は含まず）。
資料) 総務省統計局「国勢調査」

い状態である。

逆に、山形は、ほぼすべての年齢層でひとり暮らし比率が低く、「家族同居地域」とでも呼ぶべき状況だということが分かる。

もう1つの比較対象地域である鹿児島の状況を見ると、40代前半までの人生の前半では、全国と比較してひとり暮らし比率が低いが、

40代後半以降、歳を加えるに連れてひとり暮らし比率が高くなり、全国の上昇傾向と比較しても上昇率が一層高いという特異なパターンを示している。

鹿児島がこうした特徴的な姿を示している理由については、日本の中でも長子相続が普及する前の分割相続が長く残っていた地域だからだと考えられる。

図2下を見ると、東京に次ぐ大都市の大阪では、高齢層のひとり暮らし比率は東京と同様に高いが、若年層では全国平均並みであり、それほど高くない。

奈良は高齢層では全国並みにひとり暮らし比率が高いが、若年層や壮年層、特に若年層では全国の中でもひとり暮らし比率が低い点が目立っている。若者が親との同居をいとわないのと壮年の未婚率が低いのが理由だと言えよう。

宮城では若年層のひとり暮らし比率は高く、東北の中でも都会的な性格を示しているが、高齢層ではむしろ大都会とは異なってひとり暮らし比率は低くむしろ山形に近い特徴を示している。

このように地域によって、ひとり暮らしの様相は多様だということが分かる。

散布図で見るひとり暮らしについての地域の多様性

鹿児島の例からも、地域パターンを見るときは若年層のひとり暮らしと高齢層のひとり暮らしを区別して観察すべきであることが分かる。

そこで、図3では、X軸を若年層(20代)のひとり暮らし比率、Y軸を高齢層(75歳以上)のひとり暮らし比率でプロットした散布図を描いた。

この散布図で都道府県の分布状況を概観すると、X軸とY軸の指標は並行して増減する傾向がある(すなわち、若年層と高齢層のひとり暮

らし比率は両方とも高かったり、低かったりする傾向がある)ことが分かる。

一方、若年層のひとり暮らし比率があまり高くないにもかかわらず、高齢層のひとり暮らしは高いという方向に片寄った地域が少なからず見受けられる点も見て取れる。

前者の代表が東京や山形であり、後者の代表が鹿児島と考えることができるのである。

この散布図から、特徴的な地域をグルーピングしてみると以下の4つが認められる。

- ① 若者ひとり暮らし地域
- ② 高齢者ひとり暮らし地域
- ③ 高齢者同居地域
- ④ 若者同居地域

① 若者ひとり暮らし地域

X軸の値の大きい東京、北海道、京都、福岡、広島、宮城といった首都や地方中枢都市で構成されている。旧帝大の国立大学が存在しているような学園都市的な性格が相俟って、地方圏から出てきた若者のひとり暮らしが多いエリアとなっている。

② 高齢者ひとり暮らし地域

Y軸の値の大きい東京、鹿児島、大阪、高知といった地域から構成されている。

若い頃から未婚のひとり暮らしが多く、また、商業や交通機関の発達などから高齢者のひとり暮らしがしやすい環境のある東京、大阪といった大都市的地域、および地方の中でも一定の年齢まで家族と同居していても高齢になるとひとり暮らしをする社会的気風が残っている西日本の縁辺地域がこのエリアに属している。

東京や北海道、京都のように①と②がダブっている地域もあれば、①あるいは②のいずれかにしか属さない地域もある。

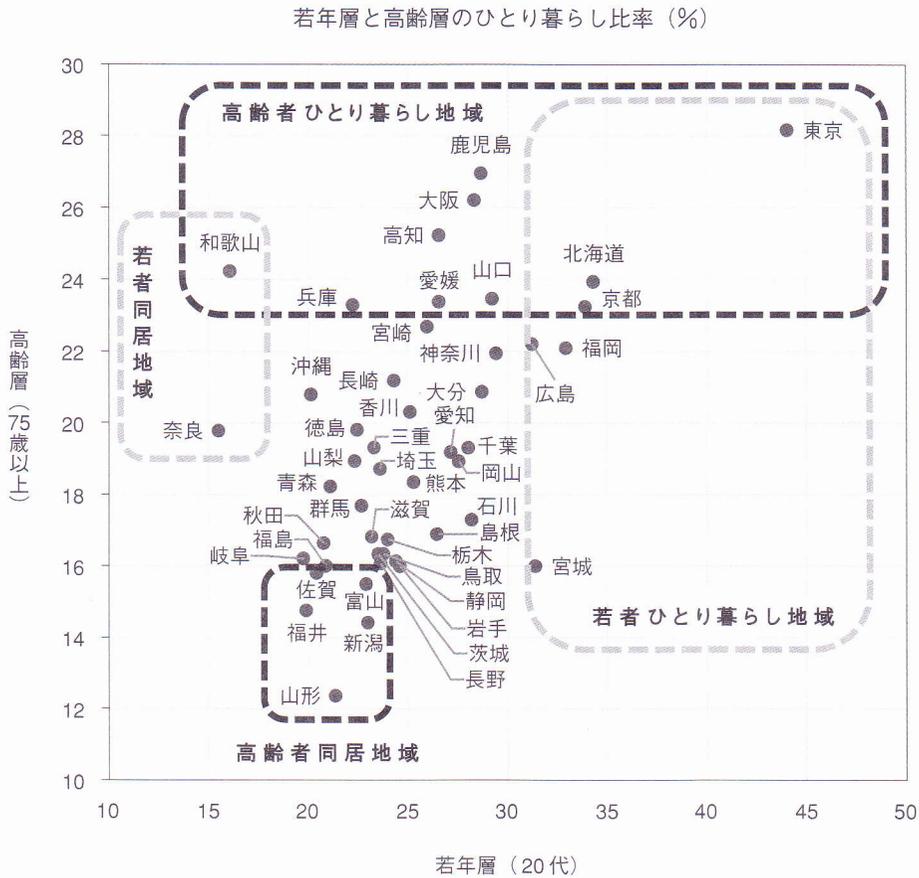


図3 若年型のひとり暮らし地域と高齢者型のひとり暮らし地域

注) 2020年。ひとり暮らし比率は年齢別単独世帯数を年齢別人口で除した値。
 単独世帯は一般世帯のみ(寄宿舎や高齢者施設など施設等の世帯の単身者は含まず)。
 資料) 総務省統計局「国勢調査」

③ 高齢者同居地域

山形を典型として、その他、新潟、富山、福井といった北陸地域や佐賀などから構成されている。北陸の中でも金沢市を有する石川は地方中枢都市的性格をあわせもっているためか、仙台を有する宮城に近く、③には属していない。

④ 若者同居地域

和歌山や奈良といった近畿の大都市周辺地域からなっている。大都市中心部の大阪や兵庫のように親の家が狭くなく、若者は親と同居できるのであろう。

このように、ひとり暮らしの年齢パターンは地域によって多様であることが理解されよう。

家族制度の地域性の違いから生まれたひとり暮らし比率の東西の違いがもっと注目されているのではなかろうか。例えば、ひとり暮らし老人の歴史が長いだけに、高齢者の福祉、介護、医療、防災などにかかわる社会慣習として鹿児島に学べる点があるかもしれないのである。